

《特別賞》

水の裏に潜む命 大阪市立白鷺中学校 3年

まつした
松 下 芽 生

もし、明日の朝、蛇口をひねっても水が出なかったら――。

その瞬間、私の日常は静かに崩れ始める。手を洗えず、飲み水も足りず、衛生環境は悪化する。考えるだけで心臓がざわつく。私はこれまで蛇口から流れる水を当然のように享受していた。しかし、防災フェスタの準備を通じて、その「当たり前」がいかに脆く、尊いものであるかを痛感した。

フェスタには、私は学校の防災チームの活動として参加した。そこでは、断水や避難所での生活方法、身近な防災グッズの活用など、多岐にわたるテーマを地域の方々に伝えた。活動を進めるうちに、水が使えないことが単なる不便ではなく、生命や健康に直結する深刻な問題であることを認識した。飲料水が不足すれば生きることすら難しくなり、手洗いや清掃ができなければ衛生環境は悪化し、感染症や健康被害のリスクが高まる。

特に衝撃を受けたのは、災害時のトイレの必要量だ。一人一日五回、七日間で三十五回分の備えが求められる。これは、普段は意識しない数字である。しかし、災害時では生死に直結する現実となるため、日常の水のありがたさが身に染みて胸に迫った。

さらに、水の安定供給は、水道やダムだけでなく、川や湖、地下水などの自然環境が守られてこそ成り立つということも学んだ。利便性の恩恵にあずかるだけでなく、環境保全を意識し、未来に向けて責任を持つことの重要性を痛感せずにはいられない。水は単なる生活の道具ではなく、命と日常を支える不可欠な資源である。

フェスタ当日、私たちの発表に地域の方々が真剣に耳を傾ける姿を目にし、自分の学びが誰かの意識を変える力になることを実感した。水の話だけでなく、防災全般の知識を伝える中で、水が生活や命を支える基盤であることも自然に理解されていた。伝える喜びと責任を同時に体感

した瞬間だった。

この経験を通じて、私は蛇口から流れる水の尊さを日常で意識するようになった。無駄に水を使わず、節水や自然環境の保護を心がけることは、未来の自分や大切な人々を守ることにつながる。水の価値を理解することは、生活の利便性を受け取るだけでなく、命を守る行為そのものなのだ。

災害はいつ訪れるか分からない。だからこそ、日常から「学び」を「行動」に変え、少しずつ備えを積み重ねることが重要だ。水は、普段はその存在を意識することはないが、私たちの生活のすべてを根底から支えている。私はその力の尊さを決して忘れることはない。未来を守るために、学んだことを生かし続けることをここに誓う。